

眉目秀麗な紳士は 指先に魅せられる

Miyako & Kota

吉桜美貴

Miki Yoobizakura



エタニティ文庫

目次

眉目秀麗な紳士は指先に魅せられる

5

書き下ろし番外編

眉目秀麗な夫に夜な夜な愛される

329

眉目秀麗な紳士は指先に魅せられる

「六木さん、来客だつて」

そう声を掛けられ、熱心にキーボードを叩いていた六木美夜子は顔を上げた。

「来客ですか？ 私に？」

美夜子が聞き返すと、マネージャーの小西聡子は「そうだよ」とうなずく。

珍しいな、と美夜子は思う。ここ、ストラトフォード・エージェンシーで総務の仕事をはじめて六年、美夜子に来客があったことなんて一度もない。

「どちらさまですか？」

美夜子が問うと、小西は首をひねりながら答えた。

「それが……日置繊維の那須川康太副社長らしいんだよね」

「ええっ！」

日置繊維といえば日本有数の繊維商社。革製品や貴金属、服飾雑貨といったアパレル製品を扱っており、ストラトフォード・エージェンシーとも関わりがある。

美夜子の勤めるこの事務所ではパーツモデルの育成や紹介、斡旋業務を行っていて、登録モデルが日置繊維のCMに出演したり、宣材に起用されたりしたことが何度もあるのだ。

「私もまさかと思って顔を見て確認したけど、間違いなかったのよ。六木さん、那須川副社長と知り合いなの？」

「まさか。会ったことも話したこともないです。というか、顔も知らないです」

「だよねえ……」

「本当に私なんですか？ 別の人と勘違いしてませんか？」

「うん。おかしいなと思って何度も聞き直したんだけど、ストラトフォード・エージェンシー所属の六木美夜子さんって言ったから、あなたしかいないよねえ。副社長が会いに来る理由、なにか思い当たらない？」

「いえ、知り合いじゃないですし、仕事でも絡んだ記憶がないです」

「そうだよねえ。確かに日置繊維はお得意様だけど、総務は直接関係ないしなあ」

「なんなんだろう。なんの用かは言ってなかったんですか？」

「本人に直接話があるからって。六木さん、悪いけど応接室へ行って直接話してきてくれる？ お得意様だから、むげにするわけにもいかないのよ」

小西は意味深にニヤツと笑ってから続けた。

「見ればわかるけど、度肝どきを抜かれる級のイケメンだから。一度拝おがんでおいて損はないよ。ちよっと！ 今、ネットで調べてみたら三十五歳独身だつて！」

小西は手にしたスマートフォンをタップしながら声を上げる。

「えええっ」

「しかも、超紳士的な人だったから、危ない目に遭うこともないはず。ほらほら、早く立つて」

「わ、わかりました」

美夜子はシルクの手袋をはめ直し、立ち上がった。

美夜子も所属モデルの一人で、手のパーツモデルをしている。しかし、売れっ子と呼ぶにはほど遠く、起用されるのは年に数回のみ。パーツモデルだけではとても生活できないので、正社員としてストラトフォード・エージェンシーの総務をしている。どちらかといえば本業はそちらで、パーツモデルのほうは完全に副業だ。

それでも、パーツモデル業をあきらめたわけじゃない。いつかはそれ一本で食べていけるようになりたいと思っている。しかし、美夜子は二十八歳。加齢は皮膚の表面に表れ、歳を取れば取るほど仕事では不利になる。ハンドスキンケアやパックにお金をかけて劣化と戦いながら、事務作業でうっかり手を傷つけないよう注意して毎日を送っていた。

事務所は品川しながわシーサイドの一角に建つ高層ビルの二十三階にある。二十坪ほどのス

ペースをテナントとして借り、部署ごとに並べたデスクの上にノートパソコンを置いて皆、仕事をしていた。事務所の規模としては小さめで、抱えているモデルは三十名弱。社長を含めたスタッフ数名で回している。

応接室と会議室は三フロア下にある。事務所とは別に借りているのだ。美夜子は階段で応接室へ向かう。途中、踊り場にある大きな鏡で自らの服装をチェックする。

事務仕事のときはいつも目立たないグレーのパンツスーツを着ている。動きやすいし、着回しはインナーを変えるだけで楽チンだ。明るい栗色の髪を前下がりのショートボブにしたところ、同僚からは『デキる女っぽい』と好評だった。二重まぶたの目尻はシャープで、鼻は小さく唇は薄く色白で、初対面の人には『ちよっと冷たそう』とよく言われる。身長は一六五センチメートルあるので、女性にしては高めかもしれない。化粧はあまりせず、少し眉を描き足し、ベビーピンクのリップグロスを引いているだけだ。手のケアに惜しみなくお金を使う代わりに、他の優先度は下がってしまう。

美夜子は横髪を耳に掛けてジャケットの襟えりを正し、肩についていた一本の髪をつまんで落とした。ぐるりと一回りして背中まで確認し、鏡に向かって『よし』とうなずいてから階段を下りる。応接室のドアをノックすると、中から「どうぞ」と声がした。「失礼します」と言ってからノブを回し、中に入る。

すると、窓を背に長身の紳士が立っていた。

美夜子は言葉失って立ち尽くす。

その紳士は、目が釘付けくぎづけになってしまふほど眉目秀麗びもくしうれいな人だった。

身長は一八〇センチメートル以上あるだろうか。比較的背の高い美夜子も見上げるほどの長身で、肩幅はがっしりと広く、たくましい。エレガントなダークスーツを身に着け、びつくりするほど脚が長く、革靴はよく磨かれ黒光りしている。スクエア型をした眼鏡はチタン製のフレームが知的で、髪は重役らしくオールバックにしてあった。外国人かと思まがうほど彫りが深く、眉は凛々りんりしく鼻梁は高く、キリツとした顔立ちだ。二重まぶたに、ずっと切れ長の目尻は鋭く、どこか見る者をゾツとさせる冷酷な光を宿やどしている。少し色素が薄いのか髪も瞳も暗褐色だ。眼鏡の奥の瞳は驚いたように見開かれている。

那須川康太。日置繊維の副社長、その人だった。

クール。傲慢ごうまんで冷淡。完璧主義でインテリ。

那須川の氷のような視線に縛られながら、美夜子の脳裏をそんなワードがよぎっていく。

日置繊維の副社長が、こんなに綺麗きれいな人だなんて！　まるで精巧せいこうに作り込まれた美麗びれいな人形みたいだ。顔の造形やスタイルに、非の打ちどころがまったくない。

彼はピリピリするような緊張感をまとっていた。頭のとっぺんから爪先つまさきまでデキるビジネスマンという感じで、三十五歳の他の男性に比べて圧倒的に貫禄くわんろくがある。隙という

ものが一切なく、親しみやすさも皆無かいむで、いいところの取締役とさくしやくという重厚なオーラを放っていた。

彼のつけたオードトワレが微かすかに香る。大人の色気を感じさせる香りに、美夜子はソワソワと落ち着かない気分になった。

二人はしばらく見詰め合ったのち、那須川のほうが先に口を開く。

「六木美夜子……さん？」

極限まで抑制された、低い美声。

「そ、そうです。私が六木ですが……」

美夜子はどうにか声を出した。

「すみません。急にお時間を取らせてしまつて……」

那須川が恐縮きそくして言うのと、張りつめていた緊張の糸がぷつと切れる。「立ち話もなんなので、どうぞ」と美夜子がソファを勧めたところ、那須川は「失礼」と礼儀正しく言つて座った。美夜子もテーブルを挟んで彼の正面に座る。テーブルには小西が出たのであろう煎茶せんちやの湯呑みが置かれているものの、手がつけられた形跡はない。

「突然のことで、きつと驚かれましたよね。面識のない私が訪ねてきて」

那須川は申し訳なさそうに言う。

さすがに「驚きました」とは言えず、美夜子は「いえ、大丈夫です」と小さく答えた。

「それで、あの……ご用件って？」

とりあえず、美夜子は聞く。

「その、実は、用件というのは……。あつ……と、その前に」

那須川は言って、胸ポケットから美しい所作で名刺を取り出す。

「申し遅れました。那須川康太と申します。御社と取り引きさせて頂いている日置繊維の取締役副社長です。一応」

那須川は慣れた様子で名刺を差し出した。

この人の声って、本当に耳に心地よい低音だなあ……

美夜子は感心しつつ、ポケットから名刺を取り出して交換する。

「ストラトフォード・エージェンシーの六木美夜子です。所属は総務課になります。今日は、どういったご用件でしょうか？」

「実は、弊社の渉外の者（まわりのもの）に探している人がいると言ったんです。そうしたら、御社の営業に問い合わせ（きこ）せてくれて、そこでマネージャーの小西さんに取り次いでくれて、六木さんのことを知ったんです」

「はあ……」

「六木さんに辿たどり着くまでに結構時間がかかりました」

なんだろう？ と美夜子は奇妙に思う。さっきから、どうもはぐらかされているみた

いだ。

「あの、それで？ ご用件というのは……」

美夜子は同じ質問を繰り返した。

「それが、えーっとですね……少々困ったことになっていまして」

那須川は歯切れ悪く言い、口を手で覆おおった。

「困ったことですか？ 弊社に、なにか不備があつたとか……」

不安になった美夜子が問うと、那須川は慌あわてて否定する。

「あ、いや。まったくそんなことはないです。御社のモデルさんたちにはいつもお世話になっておりますし、宣材も大変好評で売り上げは順調に伸びていますから。クレームですとか、御社との取引に関するものでは一切ありません。困ったことというのは、少々個人的なことなんです」

「個人的？ 那須川副社長の、ですか？」

「個人的というのは語弊（ごへい）があるかもしれないな。それが巡り巡って弊社の売り上げに繋がっていくのかもしれないし……」

「ちょっとお話の要点が見えないのですが」

「そうですね。これじゃ説明になってないかと、私もわかっています。しかし、説明のできないこの状況に困っていると申しますか……」

「なにか事件が起きたということですか？　トラブルとか？」

「事件。トラブル。いや、そうじゃなくて……」

那須川は困り果てた様子で、眼鏡のツルの部分を指でつまんだ。

眼鏡がすごくよく似合っているなど、こんなときだけだと思う。眼鏡のおかげで本性が覆い隠され、表面の顔がより一層クールに見える気がした。

彼を前にすると妙に緊張し、よく見られようと気負ってしまう。こういう、馴れ合いを一切許さない、孤高の雰囲気を持つ男性には会ったことがなかった。

けど、なんかすごく疲れてるような……

よく見ると那須川の顔色は青ざめ、目の下にうつすらクマができています。まるで戦場で戦い抜いたあと、気迫だけで立っているみたいだ。肉体はとうに限界を超えているのに、眼光鋭く気力は高く、闘志だけは燃えているような。彼の美貌には余裕がすべて削ぎ落とされた、そういう凄みがあつた。

副社長ってそんなに激務なのかなと、美夜子は呑気な思う。

那須川は頭痛を堪えるみたいに目を閉じ、言葉を続けた。

「そんな風に事件とかトラブルとか、わかりやすい形で起きているなら、そのままお話ししています。説明に苦労はしないんです。すみません、参ったな……」

参ったなと言われても困る。なにしろ、さっきから全然話が見えてこない。

那須川は目を開け、美夜子の手にはめられたシルクの手袋を見て「それ……」とつぶやいた。

「六木さんも、手のモデルを？」

「あ、はい。すみません。勤務中にも不慮の怪我を防ぐために手袋をしているんです。失礼しておりますが……」

「いや、構いませんよ。弊社もビジネスパートナーですから」

パートモデルたちは髪や脚や手が命だから保護に余念がない。那須川はビジネスパートナーだから、うちのこういう特殊さを許してくれるらうと美夜子は解釈した。

「けど、私はそんなに人気はないんです。仕事も年に三回ぐらいで」

美夜子が言うと、那須川は驚いた顔をした。

それを見ながら、美夜子はなんとなく聞いてみる。

「もしかして、私の手に関するお問い合わせですか？」

「単刀直入に言いますよ」

那須川は美夜子の話をささげつつ言い、覚悟を決めたように座り直す。そして、上体を前のめりにし、両肘を膝についた。

眼鏡越しの真剣な瞳に、ドキッとしてしまう。さすが副社長なだけあって目ヂカラが半端ない。しかも、思わず見惚れてしまう美男子なのだ。魅了されないよう心理的にプ

ロックする努力が必要だった。

「六木さん、私にお時間を頂けませんか？」

「えっ？」

「正確には今週金曜の夜に……残業があるなら終わるまで待ちますので、私の話を聞いて頂きたいんです。食事でもしながら」

「え……。それは、ここでは話せないような内容なんですか？」

「少々長くなるんです」

「はあ」

「一時間や二時間だと足りないかもしれない。ゆっくりできる場所で話したいものですから。本日はそのアポを取りに参りました」

「どうということだろう？」

美夜子はあれこれ推理する。二時間以上かかる話で、ここでは話せなくて、ゆっくりできる場所で話したいこと？ まさか……

「あ、いや。決していかがわしいものじゃないですよ！ いわゆるナンパですとか、そういう目的で誘っているわけではありません！ 断じて」

那須川は焦ったように声を上げた。

セクハラめいた雰囲気は微塵もないし、どうやら嘘を吐いているわけではなさそうだ。

それに今の言葉を聞き、美夜子が予想しているのはまったく別の物だった。

もしかして、ヘッドハンティング？

可能性が高いのはそれしかない。もしかしたら日置繊維は総務部の人員が不足していて、美夜子の噂を聞きつけてヘッドハンティングしようとしているのかも。

これはなかなか大胆な手法だぞ、と美夜子は感心する。こうして副社長が直接会いにくれば断れないし、話を聞いてみようという気にもなる。ならば、条件だけでも聞いてみようか。今の職場に不満はないから転職するつもりはないけど、日置繊維が出てくる待遇に興味があった。給与はどれぐらいなのか、今の自分ならどれぐらいの役職に就かせてくれるのか……

そこまで考えてから、美夜子はうなずいた。

「わかりました。今週の金曜日ですね。残業は一時間ほどを予定しておりますので十九時にながれます」

「えっ……いいんですか？」

那須川は自分で誘っておきながら、意外そうに言う。まるで断られるのを期待していたように。

美夜子はもう一度うなずき、「大丈夫です。お話をうかがいたいです」とはつきり告げた。「ありがとうございます。ちょっと予想外でして、断られると思っていたものですから」

「一応お話はうかがいますけれど、お受けするかどうか即断はできませんが……」
美夜子が言うと、那須川は訝しげな顔で「即断？」とつぶやく。

那須川は数秒、何事かを考えてから、さらに言った。

「とにかく承諾してくださって、ありがとうございます。少々込み入った話ですので、詳細はそのときに」

「はい。承知いたしました」

「あと、できればですね、このことは……」

「心得ています。一切口外しません。誰にも」

ヘッドハンティングの話を勤め先の人間に漏らさないのは当然でしょ、と美夜子は思う。

このときなぜか那須川は呆氣に取られた顔をしていた。しかし、すぐさまビジネスライクに「そうして頂けると助かります」と頭を下げる。

「当日の夜は、私が御社まで車で迎えにきます。到着しましたらお電話差し上げますので、六木さんは社内でお待ちください。本日は貴重なお時間を頂いて、ありがとうございました」

那須川は丁寧に言って、さっと腰を上げた。



那須川と約束した金曜日がやってきた。

十九時きっかりに事務所の電話が鳴り、待ち構えていた美夜子は素早く受話器を取る。

「お電話ありがとうございます。ストラトフォード・エージェンシーの六木でございます」

「お忙しいところ恐れ入ります。日置繊維の那須川と申します」

受話器の向こうから低い美声が聞こえてきた。

那須川さんの声、洪くて素敵すぎる！ カッコイイなあ……

那須川と話しながら、この人、声優さんになったらい線いきそう、と美夜子は妄想する。那須川ヴォイスがアプリで配信されたら速攻でダウンロードするのに！

そうして、二人はオフィスビルの社員通用口の前で待ち合わせし、電話を切った。

これから美夜子は那須川と食事に行く。今週はずっと、この日を待ちわびていた。那須川の用件が本当にヘッドハンティングなのか気になったし、もう一度彼に会うのが怖いようなうれしような、ソワソワが止まらない。

「六木さん。デートっすか」

パソコン越しに見ると、前に座る小西が半眼になりニヤニヤしている……

小西聡子は二人の子供を持つ働きママで今年四十歳になる。年の割に若く見え、すっ

きりした顔立ちの美人だ。マネージャーとは名ばかりのなんでも屋で、営業もやるし事務もやるしスカウトもやるし、役員に交じって経営に関わる仕事もする。本人曰く「私はストラトフォードの雑役婦」だそうで、なんでもよく知っていて、モデルたちの扱いもうまく大変頼りになる。

小西は仕事に対しては非常に厳しい。逆に仕事以外は「なんでもオッケー」という、さっぱりした性格だ。おかげで二人はプライベートではよい友人だった。

「超絶イケメンとデートっす」

美夜子も小西を真似してニヤニヤ顔で答えた。

「ええ。今朝方より存じておりました。六木さん、いつも色気のないネズミ色のスーツなのに、今日は黒のお洒落ニット！ シックなおオレンジのロングプリーツスカート！ パンプスもハンドバッグも大人っぽいやつだしシャラシャラのピアスマでして、ゆるふわ愛されコーデでしたから」

「……残念ながら、正確にはデートではないんです。ちょっと見栄張っちゃいました」「なあーんだ。デートじゃないのか」

「ちよつと男友達の……相談というか。私が聞く立場なんですけど」

那須川は男友達ではないけど、こうとしか言いようがない。口外禁止と言われていし、那須川と食事するなんて言ったら、小西に根掘り葉掘り聞かれそうだ。

「あちらがすぐくお洒落な人なんで、こつちも妙に気合いが入ってしまうと言いますか」美夜子が言うと、小西はしたり顔でうなずいた。

「あーなるほどね。美意識高い系の人と会うときって、そうなるよね」

「じゃ、そろそろ私、行きますね。お先に失礼します」

「お疲れさまー」

小西の声を背に事務所の出口へ向かう。エレベーターに乗りながら、彼氏とのデートというものに思いを馳せた。

彼氏かあ。欲しいっちゃ欲しいけど、出会いが全然ないしなあ……

彼氏いない歴は、かれこれ七年になる。就活に失敗して、二十歳で短大を卒業したあとの二年間、フリーターをやっていた。そのときにバイトしていたバーで知り合った人と一年だけ付き合った。最後は浮気されて、思い出すのもうんざりするほどさんざんな別れ方をした。それ以来、男性遍歴は真っ白でなにもない。

そもそも出会いが少なすぎるんだよねと、ため息が出てしまう。

二十二歳でハンドモデルにスカウトされ、ストラトフォード・エージェンシーに登録した。うちの事務所のモデルたちは全員女性だし、スタッフも女性が多く、男性は全員既婚者だ。撮影のとき、男性のカメラマンやスタイリストに会ってもせわしく過ぎてしまいうし、そもそも仕事の現場なのでそんな雰囲気になったことは一度もない。

——世の人は、どうやって出会ってるんだろ？

学生時代の友人が男友達を紹介してくれたこともあるけれど、その気になれなかった。出会いの場へ行くのが苦手だし、徒勞感ばかりが募るので、いつしか足が遠のいた。

仕事には非常に満足している。たまに忙しいが基本的に定時で上がれるし、人間関係は比較的良好だし、パーツモデルたちをサポートする業務はやり甲斐もあった。他の芸能事務所にありがちな椅子の奪い合いもなく、のほほんとしたムードなのもいい。いい事務所に入社できてよかったと思っている。

——これで彼氏がいれば最高なのだと思うのは、贅沢かな？

社員通用口から外に出ると、すでに夜のとりが下りていた。

季節は九月の上旬。今年の秋の訪れは早く、日が落ちると少し冷え込む。今日着てきた長袖ニットでちょうどいいくらいだ。寒すぎず暑すぎず、四季の中で今が一番過ごしやすい。

なんとなく足を止め、出てきたオフィスビルを振り仰いだ。まだ人々は仕事で、一階から最上階まで全フロアに煌々と明かりが灯っている。ビルの谷間を冷たい風が渡ってきて、スカートを揺らした。

京浜運河に面したこの界限は、すごく綺麗だ。

前方に目を遣ると、運河に向かって延びる一本道の途中にポツンとセダンが停まって

いた。辺りは静寂に包まれ、他に車は一台もない。時刻は十九時十五分。こんな時間に運河へ向かう用事も思い浮かばないから、人気がないのも当たり前かもしれない。

車のドアに背をもたれて立つ、長身の影が目に入った。

……那須川さん。

銀の街路灯に照らされ、すらりとしたスーツ姿の那須川が立っている。前会ったときと同じ眼鏡を掛け、髪はきっちり撫でつけられていた。彼はこちらの存在には気づいておらず、はるか遠くにあるビルとビルを繋ぐ空中通路をじっと見つめている。街路灯の明かりが、高い鼻梁から顎と喉仏の鋭角なラインを縁取っていた。

美夜子は時を忘れ、美しく整った横顔にしばし見惚れる。

すると、那須川はポケットからタバコケースを取り出し、一本咥えた。さらに顎を下げ、右手でオイルライターの火を点ける。大きな左手が炎を覆い、眼鏡のレンズがオレンジの炎を反射し、まっすぐな鼻筋と伏せられたまぶたが闇に浮かび上がった。端正な唇が美味しそうに吸い込むと、タバコの先端が明るく輝く。

那須川は目を少し細め、タバコをくゆらせた。

むちゃくちゃ絵になる人だなあ、と感心してしまう。初めて会ったときも思ったけど、ものすごく大人っぽい雰囲気な男性だ。同じ三十五歳の男性なら事務所にもいるけど、もってチャラチャラして幼いし、ちょっとあんな雰囲気は出せない気がする。那須川は

格好つけている感じはなく、すべてが自然な動作なのに、抑えきれずにじみ出ているのだ。洗練された気品とか、成熟した色気のようなものが。

そのとき、那須川は美夜子に気づいたらしく、パツと体を起こして振り向いた。美夜子も「あつ」と思つて足を踏み出し、那須川に近づいていく。

二人の距離が縮まっていく間、那須川は氷のような眼差しで美夜子を捉えて離さなかった。美夜子の鼓動は一步ずつ速くなり、体温が上がってゆく。

那須川のタバコから立ち上った白い煙が、風でふわりと横に流れた。

このとき、美夜子の内側で小さな予感が閃く。

もしかしたら、この人のことを好きになるかもしれない……

しかし、それはごくごく微かなものだ。胸の奥のほうがりりと疼いただけの。

美夜子はなにもなかったことにし、自らの感情を無視して顔を上げた。

それから、美夜子は那須川の運転する外車に乗り、お台場のホテルモントリヒトにやってきた。

那須川に導かれ、エントランスホールからエレベーターに乗って高層階へ上がると、そこには度肝を抜かれるような空間が広がっていた。

どーんと数フロアぶち抜きで、みやびな日本庭園が造り込まれている。それをぐるりと口の字に囲んだ廊下があり、料亭の個室が並んでいた。エレベーターは庭園の中心

に到着し、点々とレセプションへ続いている庭石が目に入る。

割烹、泉爛亭。超有名な老舗料亭だ。お台場のホテルに支店があるのは美夜子も知らなかった。

那須川は常連らしく、レセプションで出迎えた和装の女将と気安く会話している。那須川がすごく頼もしく思えた。自分にとつてこんな場違いな所に来て、連れの男性がテンパっていたらこちらもいたたまれない。その点、那須川はそつがなくエスコートも洗練されていた。

かくして、二人は個室に通される。

そこは言葉にならないほど、夢のような空間だった。

雪見障子の先に見える庭は、池の周りに松や紅葉などの草木が生い茂り、石灯籠が幻想的にぼうつと灯り、さつと差された和傘の真紅が鮮やかだ。反対のガラス張りの窓からは、はるか下界にお台場の夜景が広がっている。天井から吊るされた、和紙に包まれた球形の照明が窓ガラスにくっきり映り、夜空に浮かぶ満月と合わせると月が二つ浮いているように見えた。庭園も夜景もため息が出る美しさで、ここでいつまでも眺めているたい。

同じ部屋の両サイドの窓で、こんな別次元みたいな景色が見られるなんて！

そして、目の前には日本屈指のスペックを搭載した、見目麗しい紳士が座っている

のだ。

眼福すぎるっ！ 来てよかった！ 来てよかったよーっ！

美夜子はしみじみと喜びを噛みしめた。めちゃくちゃテンションが上がってしまう。まだなにも食べてないけど、ここから見える景色だけで満腹になりそうだ。

そこで、少しだけ那須川の経歴の話になる。

「出向？ なら、本来のご所属は日置物産になるんですか？」

美夜子が問うと、那須川はにこやかに答えた。

「そうです。新卒で日置物産に入社してからずっと繊維事業部にいまして、今も籍は日置物産にあります。うちはある程度の年次になると関係会社で役員として出向するのが通例なんです」

日置物産とは日置繊維の親会社である総合商社だ。日置繊維は、日置物産の繊維事業部が分社化したものと聞いている。

そっかあ、生粋のエリート商社マンか。そりゃあ、こういう店にも来慣れてるよね……「ところでこのお店、素晴らしいところですね！ お花も、家具も、窓からの景色もどれもこれも贅が凝らされてて、心をくすぐられるものばかりで」

感動が口をついて出てしまう。

「それはよかった。連れてきた甲斐がありました。六木さんのように素直に感想を口に

してくださると、私としても非常にうれしいです」

那須川はニコニコして言った。

そうこうするうちに料理が運ばれてくる。「僕は運転があるので吞めませんが、遠慮なくどうぞ」とお酒も勧められた。

ひんやりした本鮪が舌の上でとろりととろけた瞬間、美夜子はうっとりする。

うわああ……むちやくちや美味いっ！

鼻に抜ける微かな磯の香り。鮮度の高い鮪の旨味が口いっぱいに広がる。濃厚なコクのある脂質がなめらかに溶けていき、ほんのりした甘みと醤油のしよっぱさが調和していた。つるりと食道をとり抜けて胃に収まり、ため息が漏れてしまう。

それを見ていた那須川は、ふっと相手を崩した。

「六木さん、とてもいい顔して食べますね」

「はっ。す、すみません。あまりにお造りが美味すぎて、我を忘れてしまいました……」「どうぞ、存分に我を忘れてください。今夜はそのために来たんですから」

「美味いだけじゃなくて、もう本当に目に美しいですね。器とか飾りとかも上品で……」「これは秋焼ですね。食材は全国から産地直送で仕入れていますよ。甘鯛は今がちょうど旬だから、脂が乗っていて美味いですよ」

向付は本鮪に甘鯛、さらに甘海老と真ダコが形よく盛られていた。夕焼けみたいな

色の盆に据えられた一皿は、ずぶの素人が見てもすごさがわかる。味もさることながら見た目も美しく、眺めているだけでいつまでも飽きない。

「このお店のお料理には、魂が込められている。あるいは、命が懸かっている。そういうのが、はっきりわかりますね。一つの小さな器の世界を取っても」

那須川が美夜子の感嘆を代弁するように言った。

「はい。おつ、これはあきらかに全然違うぞって思います」

「ええ、板前さんの凄みが伝わってきます。何度も試行錯誤を繰り返して、極限まで高められた熟練の技みたいなの……」

「そういう感じ、わかります。もう、感動が止まらないです！」

「六木さんの素敵な笑顔が見られて、僕もうれしいです」

そう言って、那須川は柔らかに微笑む。

那須川さんて、呼吸するように褒めてくれるよね……

うれしいうな恥ずかしいような、ふわふわした心地で箸を進める。彼には同席する人を心地よくさせる才能があると思った。さすが商社マンは接待慣れしている。

甘鯛の切り身も絶品だった。自身の繊維を噛みしめると、じゅわっと甘みが口内に広がる。弾力ある歯ごたえで、少しあぶつてある薄皮が堪らなく香ばしかった。ゴクリと呑み込むと幸福感が広がる。

那須川が選んだ日本酒も、驚くほど口に合った。淡い藤色の切りガラスのぐい呑みを満たすそれは、涼しげに透きとおっている。口に含むと、目が覚めるほどキリッとした辛口で、清涼な水みたいなの喉ごしだ。後味も爽やかで、しばらく余韻に浸った。

お酒を呑むと肴がぐっと美味しくなり、肴を食べればお酒がどんどん進む。那須川から「今夜は一切遠慮しなくていい」と言われ、安心感もある。素晴らしい空間もあって退屈な日常を忘れ、心ゆくまでお酒と料理を堪能できた。

「今の懐石料理は宴席風のものかほとんどですが、もともとは茶懐石といって茶の味を生かすためのものだったらしいですね」

那須川は美しく箸を使いながら言う。

「へええ、茶懐石って……茶道とか茶の湯とか、そっち系ですか？」

「ええ、そうです。このお店のような茶寮も、茶道の精神にならっているのかもしれない」

「茶道ですか。あまり馴染みがないかも」

「私も茶道に詳しいわけじゃないですが、こういうのはすべて繋がっているなと思います」

とっさに意味がわからなかった美夜子は聞き返した。

「繋がっている？ お料理とかがですか？」

那須川はうなずき、補足する。

「茶寮さりょうって一種の空間芸術なんでしょうね。料理だけじゃなく、和室の建築や眺望、家具や調度品、掛け軸や生け花といった装飾、お盆やお椀といった食器からお酒の種類まで……それぞれに一流のプロがいて深い歴史や流派があり、個室を中心として放射状に道が延びている」

「すべてが繋がっている……?」

「そういう風に感じませんか? まるで人間の世界そのものだ。人工的なものと自然なもの調和して」

「ううー。私には難しく、気後れきおくしちゃいます。たくさんの方の努力が積み重なった場所に、私みたいな人間がいていいのかなって。自分がふさわしくない気がします」

「いいですね。私はそういう考え方が、非常に好きです」

「えっ……」

那須川の「好き」という言葉に、ドキッとしてしまう。もちろん深い意味なんてないのはわかっているけど……

「六木さんのように謙遜けんそんする感覚、とても大切だと思います。慎重つしな深い人が好きです。個人的に」

「そ、そうですか」

「こういう店は一種の聖域なんです。神社仏閣ぶつかくのような聖域にも参拝の作法があるでしょう? こも同じです。職人が魂を削けずって築き上げたものを前に、畏敬いけいの念を抱く。人間として、とても自然で重要な感覚だと思います。私も尊敬の念を抱いだきますし、やはり同席している人にも同じ感覚でいて欲しいですね」

「誰でも自然とそうなりませんか? こんなにすごい場所なんだし……」

美夜子の言葉に、那須川はおかしそうに噴き出した。

「誰でも! そんなわけじゃないですよ! むしろ、土足で踏みこむ人間が多いですよ」

「えええ! そうなんですか? そんなことないと思うけどなあ……」

「残念ながらね。この聖域を偉そうに分析したり、茶化して馬鹿にしたり、無粋ぶすいな人がいますよ」

那須川の辛辣しんれつな物言いに、美夜子ははっとして彼の顔を見る。

一瞬、那須川の刺すような目が残忍に光った。まるで首筋に刃物でも当てられた如くヒヤリとする。初めて会ったときから冷酷さを感じていたけど、今初めて目の当たりにした。

同時に、綺麗な男の人だと改めて思った。ほんの一瞬見せた冷酷な一瞥いちめつさえも、怖いの惹きつけられる。

「失礼いたしました。くだらない話で私がこの聖域を侵おかすところでした。さあ、どうぞ」

那須川は柔和な笑顔に戻ると、とつくりを持ち上げて傾ける。美夜子は「ありがたいございます」と言いながら、それを受けた。

「六木さんが素敵な方でよかった。料理もまだまだこれからですし、時間はたっぷりありますから、今夜はとことん楽しんでください」

会食は最後まで進行し、抹茶ケーキと栗のムースと梨が運ばれてきた。ジュエリーな梨は囁んだ瞬間、果汁が派手に飛び散る。すでに満腹だったのに、甘いデザートのかなめらかな舌触りに、氣づくこと完食していた。

そのあと、二人で温かい煎茶を呑みはじめたが、那須川はなかなか本題に入らない。とうとう美夜子は痺れを切らして言った。

「あのー、そろそろご用件を聞かせてもらえませんか？」

「そうですね。そろそろお話ししないといけませんよね……ここまで来たんですし」

那須川は眼鏡を掛け直して一息吐くと、覚悟を決めたように口を開く。

「六木さん。できれば、約束して欲しいのです。ここで私から聞いた話を誰にも口外しないと。すみません、やっぱり私は臆病者で約束がないとお話しできない。もし、それが無理でしたら、ここでお開きにしましょう。今夜のことは忘れてください。ご自宅までお送りします」

「えええっ……そんな！」

内心超焦りまくる。ここまで焦らされて肝心の用件が聞けないなんて！

那須川の様子からすると、ヘッドハンティングではなさそうだけど――

「約束します！ 口外しないと誓います。なので、お話を聞かせてください！」

その言葉に那須川は神妙にうなづく。

「すみません、六木さん。恩に着ます。では、ここからのお話はご内密に願います」

「承知しました。お約束します、必ず」

那須川は湯呑みを取ってぐいっとあおると、ふうっと息を吐く。そして、襟元のネクタイを左右に揺さぶって緩めた。

「ミュートーションというブランドをご存知ですね？ ジュエリーの」

ようやく那須川は語りはじめる。

「ミュートーション？」

美夜子はきょとんとオウム返しし、しばらく考えたあと、あつと思いついた。

「一度、仕事をしたことがあります。ハンドモデルの。ただ、その頃はミュートーションという名前じゃなくて、ジュエリー・サニシという名前だったと思います」

確か今から四年前の話だ。ちよっと印象的な撮影だったから覚えている。

「ええ。そのジュエリー・サニシのことです。今は名前が変わって、ミュートーションというブランドに生まれ変わりました。コンセプトも変わって、二十代をターゲットに

したいわゆるプチプラのアクセサリを主に手掛けています」

「そうなんですか。当時は確か高級ブランドジュエリー専門でしたよね」

「そうです。そして、株式会社ジュエリー・サニシは日置繊維傘下の会社です」

「あつ。そうだったんですか！ それは知らなかったです。撮影に行くとき、その企業がどこの系列会社かまでは調べないので……」

「うちの関連会社なんて山のようにありますからね。モデル事務所に仕事を依頼するとき、うちの社名で直接契約することもあれば、グループ会社と直接契約されることもあるでしょう。直接契約していない場合も、グループ企業が広告を作るとき、うちの営業がアドバイスやコンサルティング的なことをしているんですよ。マーケティングなんかも含めてね」

「ああ、そういうことなんですか」

那須川は持ってきていたブリーフケースから透明なフィルムに入った一枚の写真を取り出した。

それはA3サイズで、水面のような質感の黒をバックにほっそりした二本の手が写っているものだった。肘の辺りで両腕が重なるようすつと伸ばされ、両手は咲きほこる花のようにふわりと開き、指先はなにかを求めるように空中で静止していた。手首から腕までツタみたいにネックレスがくると絡みつき、涙の形をしたダイヤが垂れ落ちて

光っている。白銀に輝くプラチナと上品なパールの粒が交互に連なり、宝石でできた手袋をまとうているようだ。

「あつ。これ、私ですね。懐かしいな」

恥ずかしさが込み上げ、美夜子の頬は熱くなる。

「いい写真ですね」

那須川が儀礼的に褒めた。

「でも、すつごく恥ずかしいですね。実は私、自分の作品ってあまり見ないんです」

「ええ？ なぜ？」

「なんかもう無性に、異様に恥ずかしいんですよ。撮影でチェックのときは必要なので見ますけど、それ以外は極力見ないようにしています。恥ずかしさに耐えきれないんです……」

那須川は驚いた様子で、まじまじと美夜子を見た。

「……凡人には理解不能ですね」

那須川の言葉に、美夜子は困って眉尻を下げる。

「説明が難しいんですけど、変な話、ちょっと裸を見られる感覚に似てるんです。舞台の上で演技して、汚い部分も綺麗な部分も自分自身を全部さらけ出して、舞台を降りたあとそれについて冷静に分析されたり批評されたりするのって、すごく嫌じゃないです

か。それと同じです、たぶん」

「なるほど。今のたとえてわかる気がしました。きつと魂を懸けてらっしゃるんですよね。ここの茶寮の料理人たちと同じように。私もこの料理人たちが精魂込めて築き上げた聖域について、分析したり茶化したりする輩は大嫌いなので」

「まあ、ここほど高級感はないですし、聖域ってほどでもないですし、料理人の方々と並べて語るのもおこがましい気がしますけど……。一応私なりにハンドモデルの仕事に魂を込めているので」

「よくわかりました」

那須川はうなずいて、写真をブリーフケースに戻した。

美夜子は心からホッとして言う。

「今の写真、よく覚えてます。カメラマンの人がちよつと印象的な人で……」

「ええ。耳の聞こえない男らしいですね。私は直接会ったことはないですが」

「そっか、とようやく美夜子は合点がいく。話というのは、ハンドモデルに関することだったんだ。けど、クレームじゃないとしたら、なんなんだろう？ 仕事の話なら営業経由になるはずだし……」

「それで、その写真がどうかしたんですか？ なにか問題があったんでしうか」

美夜子が問うと、那須川はようやく口を開く。

「四年前、ちょうど私は日置繊維の副社長に就任したばかりでした」



那須川が初めて写真を目にしたのは、日置繊維の副社長に就任して間もなくだった。

それを持ってきたのは、当時の日置繊維営業部営業第一課長の手島という男だ。

今度、日置繊維傘下のジュエリー・サニシが日本橋に販売サロンをオープンさせる。その宣伝用の写真が役員それぞれに配られたのだ。

日本橋ねえ……

ざっと企画書に目を通し、どこかの企業もとつくにやっている陳腐な企画だと思った。恐らく売れないだろうと当たりはつく。しかし、この企画に口を出す気はない。批判だけなら小学生でもできる。那須川は役員なのだから、それでも成功させるためにうまく部下たちを動かさなければ。棋士にでもなった気分、どの駒を動かそうか考えを巡らせた。

アパレル業界は商社に乗っ取られたと、よく耳にする。

デザイナーの言い分はこうだ。商社マンは美やデザインやアートを理解しない。数字だけですべて動かそうとする。そのせいでアパレル業界のクオリティは下がるいっぽう

だと。デザイナーたちから向けられる敵意は、ひしひしと伝わってきた。

デザイナー連中の理想論にはうんざりだ。美やアートやデザインが、なんのためにあるのか？ 一般大衆を幸せにするためだ。大衆に供_{きょう}ずするため存在するのだ。アートだけを極めたけりや、業界から退_ひいて引きこもって好きなだけ制作に打ち込めばいい。誰も見やしないし、誰も興味を持たないはずだ。どうせ孤独に耐えかね、間もなく戻ってくるだろう。なにかを発信するとはすなわち、受信者の存在が不可欠なのだ。受信者を顧_{かみ}みず_にに好き勝手作ってそれを受け入れるとは、どういう暴論だよ。そんなこと物理的に不可能だろう。

しかし、彼らの言い分もわからないでもない。崇高な理想や精魂込めたデザインを金だとか流行_{はや}りだとかで踏みにじられれば、嫌な気分になるだろう。しかし、我々がいなければ彼らは宝石一つともに消費者に売れない。

かけ離れた理想と現実の狭間で、血反吐を吐いているのは彼らだけじゃない。那須川だってそうだし、どの業界だってそうだろう。誰もが作りたいものと、求められるもののギャップで苦しんでいる。映画も音楽もドラマも、建築や飲食店だってそうだろう。

そんなことをつらつら考えながら、写真を一枚ずつ眺めていった。写真は全部で二十二枚あり、ネックレスをした首元がアップで写っていたり、ティアラを被_{かぶ}った頭部が写っていたり、指輪やブレスレットからイヤリングまで商品が引き立つように撮られ

ていた。Noble and Luxury ノーブル アンド ラクジュアリー のコンセプトに沿った、なかなかいい写真だ。それなりに力のあるカメラマンが撮影したんだろう。

二十二枚すべてに目を通し、シュレッダー行きの書類入れに入れようと手を伸ばす。

さて、今後の事業方針をどうするかと考えながら。

しかし書類入れの箱に入れようとして、ふと手が止まった。

そして、なぜ手が止まったのか自分でもわからず、首をひねる。

そうだ。なにかちよっと引っ掛かるものがあつたからだ。今の写真に。

もう一度写真を手元に戻し、最初から一枚ずつ見直していく。どれだったか……この中の一枚が妙に心に引っ掛かった。

それは十六枚目にあつた。宣伝用に特別制作された非売品で、一カラットあるダイヤモンドのネックレスが写っている。肘_{ひじ}から指先まですつと伸びた二本の腕に、くるくると絡まるネックレス。社運を賭_かけて作られただけあって、ノーブルとラクジュアリーを体現した見事なネックレスだ。プラチナの白銀とパール_{パール}の乳白色がダイヤモンドをよく引き立てている。

しかし、気になったのはネックレスではなく腕のほうだった。

なんの変哲もない腕だ。綺麗_{きれい}だがモデルを撮っているんだから当たり前だし、他にこれといった特徴はない。なぜ、こんなものが気になったんだろう？

……なんだ？

眼鏡を外して目をこすり、もう一度掛けてしげしげと見直す。一瞬、なんだか見たことがあるような気がした。非常に馴染み深く、懐かしいような……

しかし、そんなことあるはずがない。腕の部分だけを「見たことがある」などとは、誰かの腕の記憶なんて一切持っていない。だが、既視感を覚えたのは確かだ。しかも、かなり強烈に。

写真の両腕は肘の辺りで重なり、手先にいくにつれて離れ、指先は大きな玉をふんわりと包むような形を作っていた。皮膚の表面はなめらかでキメが細かく、発色が実にいい。よく手入れされた爪は桜色につると光沢を放っている。

デスクの吸着ボードに写真を貼り、顔を離してじつくり眺めた。無心で、精神を集中させる。さつき意識に浮かんだ奇妙な感覚を、もう一度掘り起こそうとした。

……ん？　なんだ？

なにかが近づいてくる気配。

途方もないなにかが、だんだん迫ってくる。ずっと遠くのほうから、音もなく徐々に近づいてくるのだ。

ものすごくもどかしい感じがした。じれじれしてもどかしく、頭を掻きむしって身悶えたくなるような。長らく忘れていたとても大切なことを、もう少しで、あとほんの少

しで思い出せそうな……

……なんなんだ？

ゴクリ、と唾を呑んだ音が大きく耳に響く。

脈が一拍打つごとに速くなっていく。不安と恐怖で動悸がし、これ以上見続けると危険な気がするのに好奇心が抑えきれない。喉の奥のほうで震え、息苦しさを覚えながらも写真を見つめ続けた。

二本の白く美しい腕が、立体感を持って眼前に迫ってくる。

そのことがとてつもないほど恐ろしく、尋常じゃない感情の波が引き起こされた。

おっ、おいつ、なんだよこれっ……！

たまらず、大きく息を吸う。あまりに驚いて悲鳴を上げそうになった。

そのとき。

「那須川副社長！」

いきなり声を掛けられ、飛び上がった。はずみでオフィスチェアが軋んで大きな音を立てる。フロア中の社員がこちらを一斉に振り返った。

顔を上げると、手島が怪訝そうな顔で前に立っている。

「副社長、その写真がどうしましたか？」

「えっ……？」

「いえ、さつきからお呼びしているのに全然気づかれない様子で、写真をじっと凝視（ぎょうし）させていたので……」

「あっ……」

瞬時に意識が現実引き戻される。ここは日置繊維のオフィスで、今は昼の十四時で、これからオンライン会議があるという現実。

「大丈夫ですか？　すごい汗が……」

「あ、す、すまん。ちょっと考え事をしてた。大したことじゃない」

冷や汗をかきながら、どうにか答えた。そして、写真を取り上げて言う。

「手島、ちょっとこれ見てくれないか？」

「まさか、なにか問題がありましたか？　傷があつたとか？」

手島は険（け）しい顔で写真を受け取り、しげしげと眺めた。

「違う違う。いいからもつとよく見てみる」

手島は眉間（みけん）に皺（しわ）を寄せ、さらに写真へ顔を近づける。

「……なにか感じないか？」

恐る恐る問うと、手島は写真を縦にしたり横にしたりして首を傾（か）げた。

「……？　いえ、自分にはわからないです。すみません、なにか気づきの点でも？」

その回答に呆然（まうぜん）とし、血の気が引いていく心地がした。

手島にはわからないのだ。

「どうしたんです？　なにかご様子が変わですよ……？」

心配そうに聞いてくる手島に、「いや、大丈夫だ。問題ない」と答えた。

それを聞くと手島は、ほっとしたようにならず。

「会議、各拠点と繋がりました。じきにはじまります。行きましょう」

「ああ」

素早く写真をデスクに伏（ふ）せ、立ち上がる。

手島と肩を並べて歩きながら、どうにか呼吸を整えて動揺を抑えた。手島が声を掛けてくれたよかった。でなければ、悲鳴（ひめい）を上げていたかもしれない。それぐらい心底びつくりしたのだ。

「いったいあれはなんだったんだ……？」

会議がはじまる頃には脈は落ち着き、ようやく平常心を取り戻す。こんなに驚いた経験は生まれて初めてかもしれない。まったくなんてザマだよ。ちょっと疲れているのかもしれない。

しかし、さつき襲われた得体（えたい）の知れない恐怖が、胃の裏側にこびりついて消えなかった。会議を終え、ふたたび席に戻った那須川は、爆発物でも処理するみたいに例の写真を封筒に入れ厳重に封をした。封筒に入れるとき、絶対に写真が目に入らないよう注意し

た。昼間みたいな事態になったら大変だ。

その日は一日中、写真のことが頭から離れなかった。結局、写真は家に持って帰ることに決め、残りの二十一枚はシュレッターに掛けた。他にも同じような構図の写真が何枚かあったが、妙なことになったのはあの一枚だけだ。

いったいなぜなんだろう？ と首を傾げると同時に、好奇心を刺激された。

この月曜日を境に、那須川の人生は劇的に変わり果ててしまう。

写真を家に持って帰ったが、封を開けるのに数日を要した。開けようとすると思わぬ恐怖が蘇り、躊躇してしまふ。仕事も忙しく帰宅したらベッドに倒れ込む日々で、余計なことを考える余裕もなかった。写真は神楽坂にある自宅マンションのデスクの引き出しに入れ、放置した。

封を開けられないまま翌週に入り、火曜が過ぎ、水曜が過ぎ、木曜になる頃には『このままだとマズイ』と思いはじめる。写真が気になって仕事に集中できない。とっとと開封して、あれがいったいなんなのか真相を確かめなければ。

そうして、ようやく週末がやってきた。

土曜日は早起きして朝食を食べ、スポーツジムでみっちり汗を流した。帰りはスーパーに寄って食材を買い足す。基本的に外食だが、料理が好きなので休日は自炊するし、平日も余裕があれば朝食を作る。買った食材を使い、ランチはかぼちゃのキッシュとチキ

ングラタンを作ることにした。

オープンレンジがキッシュのチエダーチーズをじりじりと焦がしている間に、那須川は封筒を開けて例の写真を取り出した。

書斎の、といっても六畳の洋間に本棚とデスクを置いただけだが、デスクのボードに写真をセロハンテープで貼り、電気スタンドのスイッチを入れる。ライトが写真に当たるように位置を調節し、リクライニングチェアに座ってそれを眺めた。

危惧していた混乱は起きず、落ち着いてじっくり写真を眺めることができた。

素直に、とても綺麗な腕だと思った。腕だけじゃない。手首から手の甲、指先まですべてが素晴らしい。肘から手首に向かって、しゅうつと細くなっていく流麗なライン。手首の骨の控え目な凹凸。ふくらした手のひらと、長く伸びた指はうっとりするほどしなやかだ。触れたくなるほど肌が白くなめらかで、関節の皺の一本一本も計算して刻まれたように芸術的だった。桜色の爪は艶やかに光を放ち、つるりとした指の腹は触れてもいないのに、むにやりとした触感が伝わってくる。

ぞわりと、臍の下が疼く感じがした。

……なんだ？

やっぱり既視感がある。よく知っている人の腕なのか？ だから、こんなに強い既視感に襲われるんだらうか。

誰の腕なんだろう？

それを調べるのは難しくない。しかし、那須川は長い間そこで写真を見つめていた。ひどく心地よかったからだ。

ピーッピーッとオーブレンジが鳴り、キッシュが焼き上がったことを告げる。そこで、ようやく我に返った。

キッチンまで行ってキッシュを取り出し、グラタンと白ワインと共に書斎まで運び、写真を見ながらそれらを食べた。写真はただ見えてもまったく飽きない。本を読んだりテレビを観たりするより、手を見ながらのほうが食事の美味しさが増す気がした。手が宝石を引き立てるといふより、宝石が手を引き立てている。この写真の主役は宝石ではなく、手のほうだろう。

食べ終えてからもワイングラスを傾けながら写真を眺めていた。やがて太陽が西に傾いたとき、そろそろ動かなければと思った。それでも、腰を上げるのにかなりの時間を要した。まるで手の持つ魔力に縛られてしまったみたいに。

誰の手なのか調べてみるか。

好奇心に衝き動かされ、椅子から立つ。スマートフォンを取り出し、少し迷ってから電話を掛けた。

五回コール音が鳴り、手島が電話に出る。

「那須川副社長？ どうしたんですか急に。なにかトラブルですか？」

受話口から手島の緊張した声が聞こえてきた。

「いや、すまない。トラブルじゃないんだ。君に一つ頼みたいことがあるんだが……」

那須川は通話口に言った。

「頼みたいことですか？」

「先週の頭にジュエリー・サニシの宣材写真をくれたらどう？」

「ええ、お渡ししました」

「あれのデータを至急送って欲しい。僕のプライベートのアドレスのほうに」

「承知しました。やはりなにか問題があったんでしょうか？」

「問題があれば受け取ったときに話してる。あれのモデルが誰なのかわかるか？」

「えーっと、全員ですか？」

「できれば」

「いや、ちょっと個人名までは。ですが、全員ストラトフォード・エージェンシーのモデルたちです。あの事務所のことはご存知かと思いますが」

「ああ、ストラトフォードなら知ってる。うちがサニシに紹介したんだっけな」

「制作はサニシの広告宣伝部の者がやりました。撮影は確か個人のカメラマンに委託し
たと思います。ポートレイトの撮影では有名な、耳の聴こえない男です。彼か、もしくは

はサニシの広告宣伝部に聞けば、どの写真がどのモデルのものかわかると思います」

ここで一瞬、迷う。どこまで手島に調べさせるか、それともすべて自分で調べるか。

「どうもありがとう。休日に悪かった」

そう言うのと、手島は丁重に聞いてきた。

「モデルの個人名まで私のほうで調べなくてよろしいですか？」

「いや、いい。必要であれば僕が調べるから」

「しかし、なんでまた今頃になって……」

「君は知らなくていい」

「承知しました」

手島はあっさり引き下がる。日置グループの人間は上司の命令には絶対服従だった。

悪しき習慣だが、こういう場面では非常に役に立つ。

「ありがとう。それじゃ、また月曜日に」

「はい。お疲れさまでした。失礼いたします」

「お疲れさま」

那須川は、そう言って電話を切った。

とりあえず、今日はここまでだな。週明けを待って、サニシの者になにかのついでに聞くのがいいだろう。

手島は仕事の早い男で、三十分と経たずに写真データの圧縮ファイルが送られてきた。例の手のファイルはすぐにわかった。こうして画像を並べてみると、あきらかに異彩を放っている。目を引くし、まったく異質で、それはネックレスの写真の振りをして全然違うものを表現している……そんな風に見えた。ネックレスの写真に擬態した別なものか……

それとも、こんな風に見えるのは僕だけなのか？

パソコンだと画像を拡大できる。ズームしながらあちこち見つつ、つるりとしてキメの細かい皮膚だと感嘆する。角質はキリッと整い、毛穴は透明で、まさに透きとおるような肌とはこのことだ。表皮は水分を含んでみずみずしく、適度な脂分が光を反射してきらめき、それらが流れるようになめらかなのだ。

那須川はうつとりと肌質の美しさを堪能した。清らかで神聖な肌であると同時に胸がドキドキするような、艶のある肌。

そうだ。この手には、したたるような色気がある。もやがかかって見えるほど、すごく官能的で、あらぬ妄想を掻き立てるような……

股間が熱く燃えるような心地がする。猥褻画像をこっそり見るような背徳感に襲われながら、つぶさに写真を眺め回した。

……触れてみたい。この手に触れたら、どんな心地がするだろう？ 質感はどうだろ

う？ つるつるしてるのか、さらさらしてるのか。冷たいのか、温かいのか。きつと痺れるような刺激を起こしてくれるに違いない。そして、できれば舐めてみたい……

濡れた舌を皮膚の表面にじわじわと這わせる感触。それは、ため息が出るような妄想だった。

ほっそりした美しい指が、こちらに向けて伸ばされる。その硬い爪の先を、そつと唇で挟む。ひんやりした指の腹を唇の表面で優しくなぞり、つるつと口腔に導き入れる。興奮で喘ぎながらそれを舌で絡め取り、しゃぶり回す……

硬い指に口腔内を掻き回されるのを想像しながら、異様に昂つていた。脈拍が速くなり、口内の粘膜から唾液が溢れ出す。急速に体中の血流がぐうつと股間に集まっていって……

危うく勃起しそうになり、ハッと我に返った。

「？」

な、な、なんなんだっ……？ ちょっとおかしいぞ！

頭から冷水を浴びせられたようになる。かつてないほど変態的な妄想に自分でおののいた。とっさにパソコンに表示していた画像上のバツボタンをクリックし、写真の画面を閉じる。

おいおいおいおい、勘弁してくれよ……。手を相手に、いったいなんで欲情してるん

立ち読みサンプル はここまで

だ？ そもそも僕にそんな趣味なんてなからうが。僕が欲情するのは女性の裸体であつて、断じて手や指じゃないぞ。

一瞬、アブノーマルな世界へ行きそうになってヒヤヒヤした。腋の下に冷たい汗をかき、窓を見てぎよっとする。

外はすでにとつぷり日が暮れていた。時計を見ると、もう十九時前を指している。

「なんてこった……」

手島に電話したときは十六時前だった。三時間以上もひたすら写真を眺め回していたことになる。時間の経過にまったく気づけなかった。

「あきらかにおかしいだろ……」

不可解な己の挙動にゾツとする。このとき本能的に『これ以上この写真に関わるのはマズイかもしれない』と感じていた。

……疲れているのかもしれない。

妥当な推論だった。ずっと仕事が忙しかったし、今日はジムで体を痛めつけたし、自分でも気づかぬうちに限界を超えていたのかもしれない。

今夜は早く寝よう。そして、明日はのんびり過ごそう。写真のことは忘れよう。そう決意し、すぐさまパソコンをシャットダウンした。

しかしその夜、写真の手が自分の体を隅々まで愛撫する淫らな夢を見て——結局、日